新左翼

1969年
4月25日
第27号
月3回5、15、25日発行
1部 15円
1カ月50円 半年300円
1カ年600円 〒共

発行所
新左翼社
大阪市大淀区本庄川崎町
2—10 トミヤビル
電話（371）5304
振替口座 大阪 88555
昭和43年12月12日
第三種郵便物認可

記事紹介

二面
三・一五日中友好協会（正統）本部事件について＝日中活動家と反戦委の労働者の意見

三面
御堂筋の奪還を／全大阪反戦
沖縄オルグ大阪駅頭で現地報告

四面
アジアで経済圏拡張急ぐ日本独占＝マラヤ新聞「パリサン」

体制破壊の文化求めて

京大では十一日から無期限ストをつづけている教養部バリケード内で、バリサイがおこなわれている。十一日の入学式粉砕闘争で幕をあけたバリサイでは、いままで松田政男、寺山修司、斉藤竜鳳、小中陽太郎の各氏の講演会、「ヤァーヤァーヤァー」「犯された白衣」「堕胎」「荒野のダッチワイフ」等の映画、GOGOパーティー、フォークソングの夕、荒木一郎公演「叛逆のギター」など各種の催しがおこなわれ現在もつづいている。状況劇場（唐十郎）高石友也、加藤登紀子などが出演の予定になっている。

大学の学園祭ならいざしらず、バリケードのなかで、このような催しがおこなわれたことは、いままでなかったのではなかろうか。それだけに全共闘の一部からは非難され、週刊紙の格好の材料にされたバリサイは、さまざまな反響をまきおこした。バリサイ実行委員会はこの催しをする意図、目的についてまだ何も語っていない。まだ序の口だから中間総括をする段階にもきていない。ハプニングつづきのバリサイとは何なのか。混迷がつづく日本の反体制文化運動は、日本の反体制運動そのものがまだまだ狭く、奥行きのないことを示しているのではないだろうか。バリサイ自体の内容は学園祭からくらべて大してかわりばえもしないし、貧弱かもしれない。しかし、新らしい反体制文化運動の創造にむけて、学生運動の内部からバリケードを使ってこのような試みが生れてきたことは注目されよう。

バリサイはつづく
サイケ・ゴーゴーの次はこれだ！

▼▼▼ バリサイの思想 ▲▲▲

われわれは、単に政治闘争のみならず、よりトータルな戦闘を求めてバリサイを行なった。現在の全共闘運動というものも、京大における、あまり発展が見られなかった。それどころか、全共闘内部の各セクトでは、単にそのセクトの利害のために動くという傾向すら見られる。大衆運動があって初めてセクトが革命、あるいは革命的なものを指向し、なしうるのであって、セクト主義的な闘争は革命的意義を持ちえない。あるセクトなどでは、その悪憎感や、英雄的なかっこよさのために、シンパや同盟員を増すことはできるが逆に、それだけ脆落していくものも多い。だからといって、日本共産党のように革命的性格を持たない前衛党（？）にいくら結集したところで、そこでは宗教的革命信奉者となる以外に道はなく、他動的であり、革命の主体である個は完全に疎外されていく以外に道はない。

われわれバリサイのスタッフはマルクスやレーニンの書物を百冊読んだ者より、新宿で石こうを投動隊に向けて投げた労務者を高共

文化というものは、悲惨感の中から生まれない。社会主義体制の社会において、文化面がたちおくれているのは、その文化が、社会主義という体制内文化でしか存在しえないからである。社会主義リアリズムなどというのは、その典型であり、そこに自由はない。廃うことを許されない文化は、現状あったりするだけの話しだ。

バリサイの文化は、意図された秩序破壊のハプニングである。体制秩序という制秩序というものは悪であることをわれわれは知っている。体制秩序は、権力者が作った被搾力者たちへの抑圧手段であることを歴史は物語っている。法というものに関しても、殺人や強かん、盗みが合法にも非合法にもなりうる。ここにおいて絶対的なものは存在しない。

われわれはまず、相対的な道徳観、法秩序などに疑いをもたなければならない。そして、それがいかなるものか、試行錯誤してみなければならない。われわれは机上論を持たずに、実践からとりかかる。何故なら何が悪で何が善かわれわれにわからないからだ。

▼▼▼ バリサイの文化 ▲▲▲

荒木一郎の公演を初めとして、われわれは非常識なことをかなりしてきた。荒木一郎の公演を、全共闘が主催し、しかもバリケードの中で行なうなど、最初のうち誰も信じていなかったようだ。われわれにとって、荒木の公演をしなければならない必然性は全くなく荒木がバリケードの中で歌を歌ってみたかったように、われわれは歌を歌わせてみたかったのである。特に、荒木という歌手は、強制ワイセツ罪なる罪を犯し、われわれの闘う仲間と同室に拘置されていたのである。犯罪の質は全く異なるけれど、同じところにいた人間が、バリケードの中で再会するなどということは、おもしろいことだ。

写真上＝十一日バリサイ・オープニングの京大正門前
中＝バリケードの中でひらかれたGOGOパーティー
下＝全共闘に招待されて出演した荒木一郎

われわれは、放火でも殺人でもおどろおどろしくやるんでなく、スカッとやる奴は好きだ。どんなヘマでも、何もやらない奴よりはましだ。だから、われわれは荒木がバリケードの中に登場したことで、荒木が好きになった。

先にも述べたが、文化は社会主義国家では自すから限界があるためにあまり発展しない。資本主義社会においても、体制内文化はあるけれど、それに対する反体制の文化がある。プーテンや、ゴーゴーのような風俗から、反社会的な映画、文学など……。そして、それらの文化は頽廃と一般に呼ばれている。しかし、そんなきれいごとをいってみたところでギゼンにしかすぎないのは明白である。

何度もいうが、われわれはやりたいことをやるのである。だからある意味ではプーテンとともになることもできるし、荒木一郎と歌を歌うこともできる。われわれはきれいごとや道徳、体制秩序を一切無視する。そして、その中で、新たな文化を創造していくことを宣言する。

▼▼▼ バリサイの今後 ▲▲▲

バリサイは、今後も活動を続けていくだろう。まともだと考えられている文化人の講演やゴーゴーや、ハレンチだと思われていることや、かっこいいことや、ゲバルト、破壊、建物封鎖など、種々の分野で新しいものを生み出していくだろう。ブルジョア趣味だといわれようと、商業主義的だといわれようと、われわれは徹底的にバリサイを追求していくだろう。

バリサイ実行委ほそみ

▼▼▼ バリサイの思想 ▲▲▲

われわれは、単に政治闘争のみならず、よりトータルな戦闘を求めてバリサイを行なった。現在の全共闘運動というものも、京大における、あまり発展が見られなかった。それどころか、全共闘内部の各セクトでは、単にそのセクトの利害のために動くという傾向すら見られる。大衆運動があって初めてセクトが革命、あるいは革命的なものを指向し、なしうるのであって、セクト主義的な闘争は革命的意義を持ちえない。あるセクトなどでは、その悪憎感や、英雄的なかっこよさのために、シンパや同盟員を増すことはできるが逆に、それだけ脆落していくものも多い。だからといって、日本共産党のように革命的性格を持たない前衛党（？）にいくら結集したところで、そこでは宗教的革命信奉者となる以外に道はなく、他動的であり、革命の主体である個は完全に疎外されていく以外に道はない。

われわれバリサイのスタッフはマルクスやレーニンの書物を百冊読んだ者より、新宿で石こうを投動隊に向けて投げた労務者を高共

文化というものは、悲惨感の中から生まれない。社会主義体制の社会において、文化面がたちおくれているのは、その文化が、社会主義という体制内文化でしか存在しえないからである。社会主義リアリズムなどというのは、その典型であり、そこに自由はない。廃うことを許されない文化は、現状あったりするだけの話しだ。

バリサイの文化は、意図された秩序破壊のハプニングである。体制秩序という制秩序というものは悪であることをわれわれは知っている。体制秩序は、権力者が作った被搾力者たちへの抑圧手段であることを歴史は物語っている。法というものに関しても、殺人や強かん、盗みが合法にも非合法にもなりうる。ここにおいて絶対的なものは存在しない。

われわれはまず、相対的な道徳観、法秩序などに疑いをもたなければならない。そして、それがいかなるものか、試行錯誤してみなければならない。われわれは机上論を持たずに、実践からとりかかる。何故なら何が悪で何が善かわれわれにわからないからだ。

▼▼▼ バリサイの文化 ▲▲▲

荒木一郎の公演を初めとして、われわれは非常識なことをかなりしてきた。荒木一郎の公演を、全共闘が主催し、しかもバリケードの中で行なうなど、最初のうち誰も信じていなかったようだ。われわれにとって、荒木の公演をしなければならない必然性は全くなく荒木がバリケードの中で歌を歌ってみたかったように、われわれは歌を歌わせてみたかったのである。特に、荒木という歌手は、強制ワイセツ罪なる罪を犯し、われわれの闘う仲間と同室に拘置されていたのである。犯罪の質は全く異なるけれど、同じところにいた人間が、バリケードの中で再会するなどということは、おもしろいことだ。

写真上＝十一日バリサイ・オープニングの京大正門前
中＝バリケードの中でひらかれたGOGOパーティー
下＝全共闘に招待されて出演した荒木一郎

われわれは、放火でも殺人でもおどろおどろしくやるんでなく、スカッとやる奴は好きだ。どんなヘマでも、何もやらない奴よりはましだ。だから、われわれは荒木がバリケードの中に登場したことで、荒木が好きになった。

先にも述べたが、文化は社会主義国家では自すから限界があるためにあまり発展しない。資本主義社会においても、体制内文化はあるけれど、それに対する反体制の文化がある。プーテンや、ゴーゴーのような風俗から、反社会的な映画、文学など……。そして、それらの文化は頽廃と一般に呼ばれている。しかし、そんなきれいごとをいってみたところでギゼンにしかすぎないのは明白である。

何度もいうが、われわれはやりたいことをやるのである。だからある意味ではプーテンとともになることもできるし、荒木一郎と歌を歌うこともできる。われわれは

4・28 安保粉砕
沖縄の核・基地撤去
即時無条件返還を要求する
大阪府民大会
日時 4月28日 PM 5.30 集合
場所 大手前公園
主催 大阪沖縄連・反安保実行委他

新左翼東京支社設立
カンパにご協力を！

昨年八月発行以来「新左翼」は読者のご支持をえて、発展してきました。七〇年安保を来年にひかえ、反戦青年委員会と全学連に結集する戦闘的労働者・学生の闘いは、日本帝国主義支配者たちの肝を冷させています。分裂している新左翼諸党派は闘いのなかで、真の革命的翼と反革命的翼の分化が徐々に始まっており、革命的翼は統一の方向にむかってすすみつつあります。

「新左翼」は党派から自立した反戦青年委員会運動を先進的に形成してきた関西の地で発行されました。しかし、全国的政治闘争の中心である首都＝東京の地に「新左翼」東京支社をおくことは、現在の政治情勢のもとで、決定的に重要な時期になっております。

新左翼社は、読者と協力委員会の皆さんのご援助によって、東京支社をぜひ設立したいと考えております。

東京支社設立のための資金カンパに、読者と協力委員会、その他多くの皆さんの心からのご協力をお願いします。

目標額 三十万円
期日 六月三十日

新左翼社
新左翼協力委員会

自分の思想で立上れ

日中（正統）豊中支部　坂井雅一

去る三月十五日、折から開催中の日中友好協会（正統）本部常任理事会に、東京都の会員ら二十数名は大衆団交を要求し、黒田寿男会長ら多数の常任理事に、いままでの路線を自己批判させた。追及された主な内容は①日中友好運動が、貿易商社の利害によって歪曲され、安保粉砕闘争の一環からはなれていること②運営が民主的におこなわれず中央が都本部大会に干渉したこと③左派党に引回されていたことである。この自己批判書をみとめるか否かをめぐっていま、日中（正統）内部ではげしい闘いがおこっている。左派党はいち早く、この大衆団交の経過でゲバルトがあったことをとりあげ、自己批判を求める会員を反中国、反人民裏切者ときめつけた。毛青学、MLなどがこれに激しく反発するなど、毛派の各政治セクト間でも論争がつづき、大阪府本部など一部では左派党系の事務局員が解任されている。次はこの問題についての古くからの日中活動家と、反戦青年委員会の労働者の意見である。

われわれは大阪府本部一月総会の成果に立ち、三・一五事件を契機とする「山口左派」一党批判の闘いにおいて縦横の勝利を収めた。次には

1　この闘いの意味を時機を失なわず全国会員にまで大衆化せねばならぬ。

2　これを契機に、協会活動の目標と組織についての原則を明確化せねばならぬ。

要は、代々木にかわり「山口左派」が日中（正統）を組織的に支配してきたことにすべては起因する。

前衛を以て自認する政党が、大衆団体を「指導」する仕方を見れば、その党が修正主義に陥ったか否かが判定される。

官僚主義、権威主義、事務局独占、役員操縦における政治的謀議、自己的、独善的な価値基準、大衆の生活と全くかけ離れた政治意識を押売りする二元論的偽善――すべて代々木と同じではないか！

かつて加えて、幾人かの幹部の「大衆に奉仕する」と称して実は自らを中国に対し、高く売りつけようとする政治的投機主義と、それに追従する代々木風小役人の発生。これらが、特に服従を強いられた府本部の五～六の支部を被害者に仕立て上げたのだ。

主として青年学生諸君が「左派」何するものぞと一斉に立上がったとして何の不思議があろう。

日中（正統）は自立しなければならぬ。―政党―セクトの組織的専断を断じて許してはならぬ。会員大衆の意志の結集として、自らの政策を立てねばならぬ。このことは、今後とも堅持せねばならぬ原則である。

一月総会において、協会次元の問題としては「指導政党なくしては一歩も歩けぬ幹部は去れ」と、また「左派」責任者に対しては「代々木的体質」なる言葉を用いて批判し、彼らをして自己批判せしめ、結論として協会は初心にかえり大衆路線をとるべし、創立当初の組織と作風と目標についての原則――私はこれを一言に内山精神と呼ぶ――に立つべしと論じたのはこの故である。

もとより突然に公衆の面前で打撃したのではない。昨年十一月「はぐるま座」公演に伴う青年諸君の抗議アピールに励まされ、独自に個人的に書いた「代々木新町への投稿が、島田機関紙部長の手にわたる以前に消え失せた。（証拠がある）―セクトの事務局私物化の悪くどころかくのごときである。

「左派」批判総会ともいうべき一月総会のあと、「左派」はウヤムヤの内に巻返しを図った。四月七日理事会においては「左派」責任者は先の自己批判は部分的であったが如き詭弁を弄して同陣者をア然とさせた。何たる一枚舌！これこそ彼らの性格である。

今や明白となった。「左派」はわが日中（正統）を「指導」し得るさるのみならず、真面目な会員の怨恨と憤怒を買い、協会に分裂をもたらす妨害者となって現れた。

自己批判を通して、共にやろうとするわれわれの姿勢に対して「左派」の方から反中国の敵対者という烙印を押してきた。

闘わざるを得ないではないか。

今度の批判闘争のなかで最も力強く働いた百人足らずの学生・青年労働者の諸君の勇気こそ、今後の協会活動の発展の保証である。

さればこそ、この闘いの成果の大衆化に当って諸君たちに私のおせっかいをつけ加えたい。

大衆化のためには、大衆的説得力をもつ方法によらなければならぬ。この際、特に注意すべきことは、活動家にだけ解るような階級的先端言語は、やむを得ざる場合以外使ってはならない。前衛党とわが協会の区別をはっきりと頭に入れておかねばならない。前衛党の目標は革命であり、わが協会は直接に革命を目指す団体ではなくその目標は日中国交回復であり、そのための当面の最重要の政治課題は安保粉砕にある。

理論は常に両刃の剣である。批判することは同じ批判されることである。どこからか先験的に与えられる既製服のように便利な思想等どこにもない。最後は、自発的な個別的な、夫々の判断力のみが自らを律する規準である。これを支えるものは、個々人の過去の実生活に即した自覚と思想的学習である。肉化せぬ思想はいかに弱いか！　それは思想の名にすら値しない。われわれは日中友好運動において、素朴な努力を評価する。

意識すると否とを問わず、自らその対立物となり下った政治的投機分子を憎む。指導者意識が往々に、自らの大衆にある決定的な強みを失わせる。これらのすべてをわれわれは「左派」に見てきた。

「左派」といえども、正しく自己批判し、行為で証しする者はこれを容れよ。すべての事実と理論を日中友好運動を正しい原則の上に発展させることを基準として徹底せしめよ。論理の指し示すところ何処までででも行こうとする諸君の姿勢は好きだ。

これが、戦中派（超国家主義の申し子）で汚ない代々木至業生として、後悔と憤怒にまみれた私の、敬愛する青年会員諸君への闘いのはなむけである。説教口調になって恥かしい。

（「日本と中国」大阪版四月十五日号より）

私の発言

深夜、闇のなかで薄く眼を閉ざし、虚空を凝視していると、魯迅の「彷徨と憤怒」の情念が吹きながしのように、ハタハタと音をたてよいでいる、と覚えることがある。或る夜、その光景に突然、日中△正統▽のこの間の△ゲバルト▽にかかわる駄文がしおれた花弁のごとく舞っていた。たかだか、日中△正統▽という元来大衆闘争組織の何たるか問われたことのいまだかってなかった市民的団体にすぎない、いわばゆるやかな結合組織のヘゲモニーをめぐる奇妙な△友好▽商社を媒介とした、中国のうぼいあいにすぎない問題に、エネルギーが浪費させられるなど、馬鹿げたことでなくて何であろう。むしろ、同じ論争をするなら△正統▽などと己を名づける発想をこそめぐって△ゲバルト▽をするべきではないか。

ぼくたちは△ゲバルト▽大いに賛成だし、やるならニヂンではないけれど、敵が立ったままでいるような勝利ではない、徹底して相手の存在を破壊しつくすやつをやろうではないか。そこでは無論、自分もまた相手にとっては同等である。そのような姿勢でかからなければ、嘲が入いりこむ。魯迅のようにみずからが蹂れても△憎悪▽は永続する回路を獲得しなければならない。この時、はじめて自身の掌に△階級▽の憤怒がみえるだろう。「嘘で書かれた虚言は、血でかかれた真実を隠し切れ」ないのだから。

そこで、ここでは日中△正統▽―中国へ広がる極と、他方、日中△正統▽―自己へと求心する極を考えた場合、紙数に限度があって舌足らずだが、考えていることを書いてみたい。

△ゲバルト▽の△正統▽をめぐって

①　「社会帝国主義」について

日中△正統▽の中で、中国がソ連に対して「社会帝国主義」の規定を行なうと、それを媒介に叫ぶ人々が存在する。「社会帝国主義」と政治権力を握っているソ連に対して呼ぶ場合、そこでは明らかに打倒の対象であることは自明であろう。それは、新たな政治革命をへた社会権力の樹立にまで達する革命を支える主体の形成（これは決意や根性ではなく、戦略と共産主義の立場＝分析方法論である）をぬきにしては存在しないスローガンではないだろうか。

②　文化大革命の全面的勝利について

九全大会を前にして中国では一層文化大革命の全面的勝利万歳！のスローガンが響きわたっているが、真のマルクス主義の意味で、一国における△社会革命▽の全面的勝利など存在しないことは明らかであろう。中国では、このばあい生産と革命の相互浸透の問題として使用しているように思われるが、日中△正統▽のなかでは、このスローガンの位置をぬきにして、極端なところでは△万歳！▽だけが残るという具合である。△過渡期▽とは何か、という課題に答えることを抜きにして、このスローガンは理解できないと考える。

中国は、この△過渡期▽を明らかに、マルクスが「ゴーダ綱領批判」で提出した「資本主義と共産主義との政治上の過渡期」＝プロ独によって表現されている内容で使用しているが、プロ文革はそれに根本的な疑問を提起したと思われる。これは、とりわけ経済構造上から分析を行なっても、たとえば「個的＝共同体的所有」の生産様式の統一として実現しきれていないのであるから明らかである。むしろぼくたちは、△過渡期▽をマルクスの使用した意味の前段階として、現代帝国主義論と△除外された労働者国家▽との複合として把える必要があるのではないか。そして、それを△過渡期世界▽と呼ぶなら、ぼくたちは、日中△友好▽を△国際主義▽の視点からいうばあいには、それを構成する「現代過渡期社会論」を持っていなければならない、と考える。

結論的にいうならば、ぼくたちが現在逢着している問題は、日中△正統▽をあれこれすることでは断してない。問題は、△友好▽運動一つでも本気でやろうとすれば、すなわち△プロレタリア国際主義▽の内実を形成しようとすれば深い△世界革命戦略▽上のところにまでさかのぼるということである。だから本気の人間は、日中△正統▽で、どうするなど考えるより、もっと本質的な思考に頭を使った方が、世界プロレタリアの質を形成するために、すっと有効であるだろう。共に実践＝認識＝理論化の道を不断に歩もうではありませんか。

（京都　もりた　しげる　21才）

問われる党派の体質

日中問題　指導権争いに終るな

視点

（一）

日中友好協会（正統）中央本部におけるゲバルトをかけた「大衆団交」、いわゆる「三・一五問題」が発生して以降支部段階での活発な論議がすすむにつれて、日中友好運動をめぐる路線闘争のなかに正しく位置づけようとする積極的な問題提起がではじめている。

すでに本紙一、三号であきらかにしたように、日中友好運動のなかには、出発当時から多くの弱点をかかえており、それが運動の過程で是正されずむしろ拡大再生産してきたということが、今回の事件の原因であろう。

日中正統の弱点とは、一言でいえば左派党路線の貫徹であり、すなわち、反米愛国路線と生産点運動、党の指導という美名の下での引き回しと私物化であり、この方向に日中を引っぱっていこうとする一部の幹部に対して、一般会員大衆の不満が非常に高まっていることは事実であり、今回の「事件」をつうじてこの不満が爆発したとみられる。この「事件」を契機にして、日中正統の従来の右翼的偏向を正し、協会を会員が自主管理し、本来の大衆団体の形にもどそうではないかという動きがでてきたのは至極当然であろう。

（二）

現在新左翼諸党派のなかに程度の差こそあれ共通してみられることだが、党が未成熟のため、党と大衆団体との未分化の状態が各所にみられる。大衆団体が党を代行していたり、大衆団体の名前をつけているが実質は党であったりしている。この現象は、新左翼諸党派の発展過程のなかではさけられない欠陥にちがいない。問題は、各党派がこの弱点を運動のなかで意識的にどう克服するかにかかっている。

自分は新左翼だと思ってもいない毛派も、この弱点からまぬがれることはできない。むしろ、活動経歴の比較的古いトロッキスト、離革よりも、誕生まもない毛派にはこの弱点がつよいのではなかろうか。率直にいって日中正統とは革命的な大衆団体でありえないし広範な統一戦線の一翼としての大衆団体である。左派党は日中をかこいこもうとし、他の毛派セクトはこれに反対した。日中という革命とは程遠い大衆団体が、革命政党の指導権争奪の場となったのである。そして、互いに相手を階級敵ときめつけた激しいやりとりがつづいているのである。このような奇妙なことがなぜおきたのか、毛派の体質そのものが、この「事件」でとわれていると思うのである。革命政党をめざす毛派の各政治セクトは、この問題で、自己の存在をとわれていると、深刻に考えていい問題ではないだろうか。

（三）

新左翼諸党派は、レーニンとスターリンが指導してきた第三インター、正統派共産主義を批判することから出発した。第三インターとその中心であるソ連共産党の国際的権威を拒否することから彼らは出発した。この間数多くの思想と革命家が生まれ、社会主義国キューバが出現した。日本の各新左翼諸党派は、現在マルクスレーニン主義の創造的発展を求めて、模索している。革命政党にとってはこれが生命であるから、まさしくいのちをかけて探求している。

この点で自己の思想に関して極めて安易な態度が毛派のなかに、よくみられるのは残念なことである。このなかには毛沢東思想に関して、誤った認識がないのだろうか。毛沢東思想といえども、最高のレベルにはちがいないが、マルクスレーニン主義思想のなかのひとつである。他とくらべて水準が一番高いことはたしかである。だから毛沢東選集をよんでいれば、その人は自動的にマルクスレーニン主義の最高水準をきわめた、他の新左翼諸潮流より高い認識をもったと考えるならば、それは子どもじみてはいないか。少なくともマルクスレーニン主義の他の諸潮流なり理論と毛沢東思想とを比べなければ、一人よがりというものだろう。こんな怠け者を理論的に表現すれば、新島淳良氏のいう毛沢東思想の絶対化ということになるのではないだろうか。

少なくとも、日本の革命をやりとげようとするならば、毛沢東思想をさらに高く発展させ、マルクスレーニン主義を文化大革命もふくめて、世界革命の総括のなかから発展させようという態度が必要ではないだろうか。それは毛沢東思想の絶対化とは無縁であろう。

（四）

今回の内ゲバは決して大衆の自然発生的な高揚といえるものではなかった。これを大衆の自然発生的な高揚と賛美し、このような内ゲバを是認する党派が存在しているということは、よく考えてみる必要があるのではなかろうか。

大衆運動は勢いの赴くところ、ゲバルトが発生するのは了解できるが、しかし、党派がそれを是認し党の方針とすることとは、自身から問題は別である。われわれの目的は人の思想をかえることである。暴力をつかって人の思想を変えるというのは、没落の運命にある資本家の論理であって、労働者階級の論理ではない。これは毛沢東思想とはまったく無縁のものではないだろうか。自らの思想的弱点を暴力でカバーせざるをえないような貧困な思想こそ、いまやとわれているのではなかろうか。

レーニンが「左翼小児病」のなかで強調しているように、眼前の称号は自分で勝手に名のることでなく、大衆によって与えられるものではないのか。現在、多数の諸党派が存在し、そのいずれも決定的な思想を獲得しえていず、政党が未成熟なため政党と大衆団体とが未分離の状態のなかで、政党の指導と大衆団体との関係は複雑であるが、大衆組織が政党の指導を拒否するのは誤りであり、政党は当然大衆団体の指導の責任を負わなければならないことはもちろんである。しかしそれは、各政治セクトが、大衆の力量を結果し、それを発展させることに専住することによって可能ではないのか。

大衆闘争、大衆実践のなかでの自己の方針の検証を軽視し、内ゲバなどに浮き身をついやす余裕はこの厳しい七十年安保をひかえた政治情況のなかでは、革命政党に許されないはずである。

アメリカ帝国主義は、日本の青年の血を欲しがっている。日本帝国主義も、肉弾を必要としている。一体この肉弾を彼らはどこにとばそうとしているのか。日中友好運動の役割、青年学生の圧倒的多数を反体制の側に獲得する政治的意義が、日中友好運動にとってどんなに死活の意義をもっているか、明らかではないか。われわれは、この大きな目標のために闘いに立上がっているのではないのだろうか。

（O）

「新左翼」に投稿を

読者の投稿を歓迎します。この新聞に対する意見、評論、身近に起ったできごと、各団体の行事予定等、編集部へとどけて下さい。とく名でもかまいません。

新左翼社

御堂筋を必ず奪還

全大阪反戦が集会で訴え

全国各地で、四・二八沖縄闘争にむけて活発に集会やデモがおこなわれている。全大阪反戦をはじめ各地区反戦は、七十年安保闘争の重大な段階をひかえて、この闘争にむけて、地域の戦闘的な人びとすべてを結集し、官憲の弾圧をはねのけ、佐藤自民党政府の肝をひやさせる闘いをつくりだし、日本の階級闘争をさらに高度に発展させようと、準備をかさねている。

全大阪反戦主催の「安保粉砕、沖縄闘争勝利全大阪決起集会」は十八日午後六時より、約二千人の反戦青年委員会に結集する労働者学生が参加しておこなわれた。この集会は、東京で二十日におこなった全国反戦集会に呼応し、四・二八闘争勝利をめざしておこなわれた。この集会で各代表は決意のなかで「四・二八闘争では首都を包囲し、首相官邸と国会の占拠を目標にして、全国に大規模な闘いをまきおこし、大阪では官憲の弾圧をふきぬけ全力をあげて御堂筋を奪還する。いよいよ七十年安保の決戦段階に入ったいま、官憲のファッショ的な弾圧に対して実力闘争で立ちむかい、広範な労働者、学生、市民を決起させ、侵略と反革命の安保を粉砕しよう」と訴えた。

機動隊三千名を動員して弾圧しようとした自民党政府の妨害をけって、中央郵便局まえまでデモ行進をおこなった。

政府に集中打撃を

関地区　労学決起集会開く

二十日夜、関西地区反戦連絡会議は、大阪森の宮市立労働会館で「四・二六、四・二八闘争勝利、安保粉砕、沖縄基地撤去労学決起集会」をひらいた。この集会には二百名あまりの労働者、学生が参加した。

この集会は、いよいよ七十年安保闘争の決戦段階をむかえて、四・二六～二八闘争に対する各地区反戦の意志を統一するためにひらいたもので、城北、西大阪、堺、北大阪、京都、神戸の各地区反戦、近大全共闘、大阪府学連、毛沢東思想青学共闘、共産主義青年同盟の各代表が闘争報告と、決意表明をおこなった。

この集会のはじめに、関西地区反戦連絡会議の和田事務局長は四・二八闘争の意義についてあらまし次のようにのべた。「すでにこの間の学園闘争や春闘が示しているように、個別闘争は権力の直接的な弾圧をうけ、権力との不断の対決を招いている。しかし個別闘争故に深く鋭い対決になりながら各個撃破され、後退を余儀なくされている。政府＝中央権力に対する攻撃を組織することによって、全大民の団結をかちとることができる。絶権力によって奪われた民主主義は、全大民の中央権力に対する集中的政治闘争によって一挙にうばいかえすことができる。四・二六～二八闘争は、首都における四・二八闘争によって決定される機動隊の事実上戒厳令ともいうべき街頭制圧と横行する石翼のテロをうちくだき、政府権力中枢に迫る圧倒的かつ徹底的な闘いをかちとる必要がある。安保・沖縄闘争の最大で決定的な戦場である十一月の佐藤訪米阻止闘争は、きたる。

この闘争で獲得した成果をもって、再びバリケード、石礫闘争を発展させ、十一月にむけて圧倒的な中央権力闘争、地域マッセンストをつくりだしていかなければならない」

自衛隊の弾圧にひるまず集会をひらく労働者と学生たち

自衛隊が直接介入

大阪　信太山基地撤去でデモ

二十日午後一時、国鉄阪和線信太山駅前で、ダイキン・信太山共闘会議は、信太山自衛隊基地撤去を要求する集会をひらき、基地にむけてデモをおこなった。この闘争には五千名あまりの労働者、学生が参加した。

集会では、堺反戦、阪南反戦（準）堺べ平連などの代表が発言し、自衛隊は世界の平和と国民の生命と財産を守るためという自民党政権の宣伝を、闘争によって暴露し、侵略と抑圧のための軍隊であることを人民のまえにあきらかにしようと訴えた。

自衛隊基地は門をしめ、内部に完全武装の機動隊を配置するというものものしさであった。警察の制止を無視して、デモ隊は正門前で集会をひらくや、門から数名の自衛隊員がでてきて集会を妨害した。デモ隊はこれにひるまず「自衛隊基地と抑圧の帝国主義軍隊を解体するぞ」「七〇年安保粉砕」などのスローガンを高たかく叫んだ。

となりの和泉府中駅までデモをおこない、警察の弾圧をけって総括集会をかちとったのち、三時すぎ散会した。

八尾空港基地化粉砕に三五〇結集

二十日午後一時すぎ、大阪の国鉄八尾駅前で、四・二六～二八沖縄闘争勝利、八尾空港自衛隊基地化粉砕集会をひらき、城北、河北大東、東大阪、南大阪の各地区反戦青年委員会に結集する労働者、学生約三百五十人が参加した。

集会では各地区反戦の代表から「四・二八沖縄闘争に勝利しよう。首都を包囲し、首相官邸と霞ケ関官庁街を占拠し、国家権力をまひさせよう」と力づよい決意表明があり「八尾空港の自衛隊基地化を阻止しよう」「八尾自衛隊の治安出動を粉砕しよう」などのスローガンを叫びながら、国鉄志紀駅までデモ行進をおこなった。この途中、自衛隊の八尾駐とん部隊の前で、機動隊の妨害を排除し抗議集会をおこなった。

本土並みを拒否

沖縄オルグが現地報告　大阪駅頭で討論会

ベ反戦行動委

ベトナム反戦大阪行動委員会は十九日午後六時半より大阪駅東口の広告塔前で、真に沖縄県民と連帯し、沖縄県民が願っている内容で祖国復帰を勝ちとるには何をすべきなのか、沖縄は本土のわれわれにとってどのような意味をもっているのか等々について考える「沖縄は訴える！真の復帰とは何か？」の街頭市民討論会を開いた。

広告塔前の会場には、沖縄の米軍基地図、基地の現状を写した写真、"戦いましょう"と呼びかける沖縄の女子高校生の詩などが展示され、通りかかった多くの市民が足をとめこの討論集会に参加した。

集会では、本土の四・二八闘争のため沖縄からオルグにきている沖縄教職員会の宮里宏氏が出席して、現地報告を行なった。次いで現地報告に対する質問が行なわれ討論に移ったが、多くの戦争を経験してきたというある老人は「戦争に負けてとられても沖縄は日本のものだ、アメリカが沖縄にいる道理はない、日本に返すのがあたりまえだ。沖縄の同胞のことを考えたら佐藤なんかにまかしておれん」と訴えていた。

集会中すぐそばで「日本精神復活運動」なる右翼団体がマイクでがなりたてたり、鉄道公安官が来てマイクをとりあげるなど妨害が加えられたが、集会はそのような妨害を排し行なわれ、討論は数カ所にわかれて夜遅くまでくり広げられた。宮里氏の報告はあらましつぎのとおり。

私たちは過ぎ去った一世紀にあたる二十四年間、アメリカと佐藤政府によって差別されてきた。本土では明治百年は繁栄の百年と謳歌しているが、私たちはこの百年を差別の百年と受けとっている。

沖縄は山、川を含めた全土の二〇％が軍事基地で、ところによっては市町村の半分以上が軍事基地になっているところもある。太平洋戦争直後アメリカは沖縄を占領し、個人の財産、家、田畑を無差別につぶし基地にしてきた。本土にも基地があるがこれは安保条約による国と国で結ばれた基地であるが、沖縄はそのようなものでなく、アメリカの必要に応じてどんどん基地が拡張されており、本土の基地とは意味がちがう。

日本が完全な独立国といえるのは沖縄を無条件即時返還をしたときである。本土でくり広げられている安保粉砕の闘いとわれわれが叫んでいるサンフランシスコ条約三条撤廃を結びつけ、サンフランシスコ体制を打破していくこと、それがわれわれの運動の目標であり、それを達成したとき日本ははじめて完全に独立したといえる。

本土の繁栄が沖縄を犠牲にしたものであるといわれているが、われわれは沖縄のことだけを考えてくれというのではない。本土の人たちの生活の向上も真の沖縄の返還後にあるということを考えていただきたい。

本土の返還闘争は考え方の違いからいろいろな形で闘われているが分裂した闘いでは返還は勝ちとれないと思う。統一できる時点で行動を共にし、沖縄返還の闘いを一人ひとりのものにしてほしい。

昨年十一月十九日ベトナムにむけて飛び立とうとしたB52が墜落し、その周辺が戦場のようになったそのとき、われわれは生命あっての生活、生命あっての教育だということを身でもって感じた。そして生命を守る県民共闘会議を結成し、二・四の闘いを組んだ。われわれの生命はわれわれで守る以外にはない。

この秋に佐藤が訪米し、沖縄について話し合うが、これは核付き自由使用、あるいは核付き本土なみということで話しあわれる予想がたてられる、私たちはこのことを非常におそれる。沖縄を利用して日本が軍国主義化しようとしている企みを見抜かなければならない。本土はいま核をもっていないしかし、沖縄県民の返還の声を利用して、本土に核をもち込み、侵略戦争をしようとしている。われわれはこのような意図を粉砕するため無条件即時全面返還といっている。われわれの復帰とは核つきとか、本土なみとかいうことを一切許さず、憲法第九条のもとに帰るということである。

ダイキン軍需生産に抗議

四月十五日午後六時、大阪・堺市の開口神社にダイキン・信太山闘争共闘会議に結集する労働者、学生六十名あまりが結集し、ダイキン工業の軍事生産に抗議する集会を開き、デモを行なった。

この日の行動にむけて堺反戦、阪南反戦（準）、堺反戦反安保行動委員会、堺べ平連、金属反戦（準）は共闘会議を結成し、四・二八にむけてのスケジュール（七日沖縄討論会、十五日ダイキン抗議デモ、二十日信太山自衛隊基地撤去デモ、二十五日堺決起集会）とスローガン（ベトナム侵略反対、七十年安保粉砕、ダイキン軍需生産反対）を決定した。

（四面につづく）

救援会連絡センター

発足にあたって

現在、広範な人びとによって、反戦・反安保の闘い、権力への抵抗の闘いがくり広げられています。

これらの闘いに対して、国家権力は、権利と称する毒物の使用、ガス弾の水平狙撃、逮捕後のリンチ、大量逮捕、長期拘留、弁護活動と差し入れに対する妨害、弾圧を急速に拡大強化しています。

一九六七年羽田闘争以後、反戦闘争への弾圧に対して、側面からのささやかな救援活動が行なわれてきました。

しかし、現在、私たちのささやかな活動では、数千万、数億円にものぼる保釈金の調達はおろか、組織だった差し入れ活動すら十分に行なわれないありさまです。これは、そのまま、被逮捕者への権力による人権侵害を許すことであります。

私たちは、次のような救援の基本的立場を明確にしながら、救援活動をもっともっと組織だて強化しなければならないと考えます。

一、国家権力による、ただ一人の人民に対する基本的人権の侵害をも、全人民への弾圧であるとみなす。

一、国家権力による弾圧に対しては、被逮者の思想的信条、政治的見解のいかんを問わず、これを救援する。

そのため、ここに、救援連絡センターを発足させ、各種の救援組織を援助し、それら相互間の連絡に資することにより、救援活動を飛躍的に強化したいと考えました。

救援連絡センターの維持に必要な費用は、一般の救援資金カンパとは区別し、その維持のために定期的に拠金する会員の会費でまかないたいと考えます。

救援センターの発足にあたってみなさまの御協力をおねがいします。

一九六九年三月二九日

救援連絡センター

東京都港区西新橋二―六―八　電話（五六一）一三〇一・一三〇二　振替口座番号　東京　一〇五四四〇

世話人

遠藤幸孝　大沢真一郎　斉藤治一　関谷興仁　福富節男　古田晃　本間樂　ものべなおき

四月二日現在の協力会員

浅田光輝　安藤彦太郎　いいだもも　井上清　池田諭　茨木のり子　梅本克己　小田実　大井正　岡崎雄　岡本潤　笠原芳光　片桐ユズル　春日庄次郎　樺光子　久保田寿子　黒田寿夫　黒田寿男　小山弘健　佐々木更三　佐多稲子　清水知久　杉浦明平　鶴見俊輔　奈良本辰也　西順蔵　西尾晃　西川彦義　眼岸敏文　野田弥三郎　野村修　羽仁五郎　針生一郎　樹本セツ　松岡洋子　三木卓　水田洋　向井孝　持田裕生　矢動丸広　保持清　山際永三　山下菊二　雪山慶正　渡辺一衛　石田郁夫

あらゆる弾圧被犠牲者を救援する募金グループ　安保闘争犠牲者救援彩並市民連絡会議　王子闘争救援会　救援活動を拡げる会　三里塚闘争救援会　市民を守る市民の会人民救援会準備会　世田谷救援連絡会議　東大全共闘を支持する会救援部　東大闘争統一救対部　日大闘争救援会　日大全共闘救対部　羽田十八救援会（羽田、佐世保、十・二一）武蔵野三鷹東大闘争犠牲者救援会　六・一五救援対策委員会

センターの仕事と機構

一、主な仕事

1、各事件別救援会・救対部・弁護団・被告団の連絡

2、各救対・弁護団による救援・弁護活動の場所

3、各地区での差し入れ活動の情報センター

4、弾圧の実態の究明と宣伝

5、資金カンパ及び各事件別救援会の資金カンパ活動への協力

6、各事件別救援会、地域における救援組織の発足への働きかけと援助

7、全国各地における救援活動の情報センターとしての機能

月刊及び臨時ニュースの発行

8、医療救護団との協力と連絡

二、機構

1、事務所をもつ

2、専任事務員を一名おく、その他数名事務員をおく

3、世話人数名をおく、世話人は、救援連絡センターの仕事を総括し、その活動に任を負う

4、連絡会議は、各救援会、各救対部、弁護団、被告団、医療団などの代表および事務員・世話人によって構成し、運営について相談する

5、協力会員、このセンターの趣旨に賛同し、維持費をおさめる団体および個人

三、財政

1、事務局経費および諸経費は、協力会員からの会費によってまかなう

2、会費は、月額一口五百円とする

3、会計報告は、連絡センターのニュースを通じて定期的に行なう

アジア侵略の兵器廠

経済圏拡張急ぐ日本独占

シンガポールで発行されているマラヤの新聞「パリサン」は最近、留日マラヤ学生連合会の季刊誌「留日青年」第一号の論文を転載した。この論文は、日本反動派支配集団が米帝国主義のアジア侵略政策に奉仕するため、東南アジアに対して気違いのように政治・経済拡張を行なっていることを暴露している。論文はあらまし次のようにのべている。

日本独占資本は長期にわたって東南アジアの豊かな資源と広大な市場に対して、食指を動かしてきた。第二次世界大戦後、米帝国主義は日本軍国主義の復活をそそのかし、励まし、日本反動派が太平洋地域で「積極」的な役割をになうことができるようになり、社会主義の中国を包囲し、東南アジアの各反動派と緊密に結びついて、東南アジアの民族民主解放運動を共同で弾圧するようのぞんできた。

一九六〇年に日米「安保条約」を結んでから、とりわけ佐藤内閣が成立してから、日本反動派は軍国主義の復活を大々的にはやめている。「第三次防衛力整備計画」（一九六七～一九七一年）のなかで、佐藤政府は二百二十四億円にのぼる軍備計画を打ち出した。この「第三次防」計画の総行期間に日本自体が生産する軍事装備は、「自衛隊」が使用する全軍事装備の八〇％をしめることになる。このことからみても、米日反動派が戦争政策の遂行に拍車をかけている状況のもとで、日本はすでにアジアを侵略する米帝国主義の兵器廠になっている。

米国の励ましと支持のもとに、日本独占資本は急速に発展をとげている。とりわけ米国が引き起こした朝鮮侵略戦争とベトナム侵略戦争で、日本独占資本はさらに不義の富をこやした。ベトナム侵略戦争における「特需」の受注だけでも、年年二十億〝ドル〟に達している。いまの利益を維持し、拡大するために、日本独占資本は新たな刺激を作り、新たな市場を開拓しようともくろんでいる。

戦後日本の最も反動的な佐藤内閣が、このように一途に米帝国主義の侵略戦争に尽力していることは、戦争を好み、戦争に頼っている日本独占資本の本性をまさしく物語っている。どのようにして新たな刺激を作ろうというのか。日本のブルジョア新聞・雑誌はみな「第二のベトナム」となるのが、タイと「日本の生命線」のマラッカ海峡の両岸であるとほぼ先走りしている。つまるところ、かれらは東南アジアで侵略戦争が行なわれることをのぞみ、東南アジアがかれらが商品を売りさばき、原料を略奪し、安い労働力をしぼりとる場所となることをのぞんでいるのである。

拡張政策を実行するために、日本反動派は社会主義中国と東南アジア各国の民族解放運動を不倶戴天の敵とみなしている。かれらは一段と露骨に、ますます狂ったようになって米国のアジア侵略政策を執行している。とくに昨年のジョンソン＝佐藤コミュニケ発表以来、日本反動派はたえず「日米の共同責任」とか、「アジアに対する中国の脅威」とかをたえずわめきちらし、中国を包囲し、東南アジアの民族解放運動の弾圧のために世論準備を企んでいる。日本独占資本とその政界における代表人物は、いっそうひんぱんに暗躍し東南アジアの各かいらい集団との結託に拍車をかけ、反共的組織をつくり、アジアにおけるその「指導」的地位と経済的利益を確保しようとしている。

統計によると、戦後から一九六六年末までに、日本独占集団が各種の経済侵略の手口で、東南アジアに輸出した資本はすでに四十億〝ドル〟以上にのぼっている。そのなかには、いわゆる「戦争賠償」や「経済協力」、投資および長期延べ払い借款などが含まれている。このほか、日本の対東南アジア貿易は毎年いずれも大幅な出超となっている。また日本独占資本は毎年、これらの地域から大量の豊富な資源を運び出し、製品にして、再び高い値段で大量に原料生産国へ送って売りさばいている。こうした売買で、日本独占集団は東南アジアの勤労人民に対し二重の搾取を行なっている。この十年間に、日本は貿易を通じて東南アジアで五十六億〝ドル〟をかすめとった。

貿易面で不等価取引を行なうほかに、日本独占集団は東南アジアの安い労働力に目をつけた。このため、海外への資本輸出、工場や分工場の開設に拍車をかけている。同時に、東南アジアの各かいらい政権は、不安定な政権を維持するために、いずれもそれぞれ帝国主義国に「借款」「経済援助」をもとめ、それによって国内の人民を弾圧している。外資をとりつけるために、各かいらい政権は、外国の独占資本に有利で、国内の勤労人民に不利な多数の投資法令を作った。

インドネシア・ファッショ軍人政権は、国内資源をたたき売りし日本独占資本集団に身を寄せる面で一層きわだっている。今年の三月、佐藤反動政府とスハルト反動政権が「経済援助」協定を締結後日本独占集団は即座に先をあらそってインドネシアに進出した。日本独占資本「富士製鉄」「川崎製鉄」および「三井物産」などの大企業がみな、インドネシア各地に工場をたてることを計画している。「日本軽金属」「昭和電工」「住友化学」の三社と日本反動派は契約を結び、インドネシア、ミンダナオ島の鉄鉱石を採掘し、工場をたてることを計画している。その他、日本独占資本はさらにインドネシア・ファッショ軍人政権とスラウエシ島でニッケル鉱の探査と精錬工場の建設を行なう契約に調印した。その他、インドネシアに進出した日本の会社はすでに五十六社に達し、その中には工業・運輸・銀行・貿易など各業種の独占資本が含まれている。日本反動派はこうした「経済援助」と「技術援助」の看板のもとに、インドネシアの資源をつぶいとり、大量に資本を輸出して、インドネシア勤労人民を搾取している。インドネシアに対する日本独占資本の経済侵略は、東南アジア各国に対する経済侵略の縮図であるといえる。

日本独占集団は盲んじて米帝国主義のアジア侵略政策を一途に執行している。かれらは米帝国主義の援助のもとに、「実力を後ろだてとし、経済を前に立てて」東南アジアに進出し、東南アジアの資源を略奪し、「大東亜共栄圏」の再演を夢みている。今日の日本人民、今日のアジアはすでに目覚めている。日本反動派が米帝国主義とグルになり、東条内閣のかつての道を歩むなら、その末路は「先輩の東条」よりもっと無惨なものとなるであろう。（中国通信）

岡山大全共闘にカンパを！

岡山大学では警官の死亡事件以来、図抜な弾圧がつづいている。四月十八日朝、二人目の自治学生が岡山県警に出頭した。ところが出頭した学生たるものは医学部闘争委員会とは関係のない学生で事件の現場にいたかどうか、闘争委員会側では確認していない。

十九日、医闘委の児玉克子委員長と教育学部の武本節子君が、中国地方学生集会に参加する途中逮捕された。

岡山大全共闘は、大学当局、警察権力、地元右翼、マスコミ、日共民青の包囲攻撃のなかで、バリケードを防衛し、闘争を堅持している。

カンパの送り先＝岡山市岡一六四岡山大学内若手研究者共闘気付、岡山大医学部闘争委員会

フォーカス・レチナ作戦

自衛隊の朝鮮出動準備

朝鮮問題研究所で発行の「月刊朝鮮資料」四月号は、最近のアメリカ帝国主義の軍事挑発活動の激化と、日本帝国主義の積極的な加担の実態を暴露する論文を掲載している。そのなかで、最近おこなわれた「フォーカス・レチナ」作戦が「米韓日共同作戦」であり、日本の自衛隊の海外派兵の設取りが着々と進行していることをあきらかにしてあらまし次のようにかいている。

大空輸作戦の強行

南朝鮮で「臨戦態勢」確立策動が急テンポにおしすすめられるなかで、アメリカ帝国主義侵略者はさる三月九日から二十日までの間に、いわゆる「史上最長距離の大空輸攻撃作戦＝フォーカス・レチナ作戦」（網膜の焦点）という挑発的な軍事演習を南朝鮮の京畿道一帯で強行した。かれらは、この演習の「作戦目標」として、①米太平洋地域司令部が管轄している総合予想地域への米戦略打撃司令部所属兵力の迅速な展開能力の点検、②アメリカ帝国主義が「自由主義国家」と締結している軍事条約を履行しうる能力があるという信頼の強化、③米打撃司令部の戦略機動訓練および駐「韓」米軍と南朝鮮かいらい軍との戦術訓練、④米空輸司令部（MAC）の戦略および戦術訓練、⑤合同および統合軍の指揮統制価と対策など、八項目をかかげている（東亜日報三・一〇）。

これからも明らかなように「フォーカス・レチナ作戦」なるものは、アメリカ帝国主義者が、共和国北半部にたいする不意の武力侵攻を強行する場合、アメリカ本土からの膨大な戦略予備軍と作戦物資の即時的で「効果」的な投入の可否を「検証」し、「アメリカ機動戦略司令部」が南朝鮮占領アメリカ帝国主義侵略軍と現地の雇用兵を侵略戦争にいっそう迅速にかりたてうる、単一の「指揮体系」を完成することをその主な目的とするのである。すなわち、この「作戦」は、「柔軟対応戦略による軍隊編制の巣大成」を朝鮮での新たな戦争挑発という凶悪な侵略的陰謀のもとに「検証」しようとするものである（国際新報　二・二八）。

この「フォーカス・レチナ作戦」は、米合同参謀本部直属米戦略打撃司令部の指揮統制のもとに実施され、参加兵力は、米第八二空輸旅団二個機械化大隊、一個混成砲兵大隊＝二五〇〇人をはじめ駐「韓」米軍第七歩兵師団所属一個大隊と、かいらい陸軍二個歩兵大隊およびかいらい特殊戦団兵力＝五〇〇〇人を含む計七五〇〇人で、これにC130、C141など空軍輸送機約八〇機と駐「韓」米軍の戦術ジェット爆撃機および偵察機七七台が動員された。

このような兵力と戦闘装備の動員のもとに展開された「演習作戦」では、仮想敵陣地にたいする落下傘兵の降下、空輸攻撃をはじめ、駐「韓」米軍およびかいらい軍との合同機動作戦をくりひろげる積極的臨戦形態など、多角的な作戦形式が総合的にテストされたといわれる。（韓国日報、二・二七、京郷新聞、二・二六）

この演習が共和国にたいする戦争挑発演習であることは、またアメリカ帝国主義者がこのような挑発的な軍事演習と時を同じくして軍事境界線での戦争挑発騒動を悪らつに強行したことからもあきらかである。かれらは、さる三月十一日の昼十二時二十分ごろ、戦線西部の板門店西端軍界線非武装地帯に数百名の武装人員を侵入させ共和国北半部哨所にたいし武装襲撃をくわえる一方、十五日にも数十名の武装人員が二〇〇〇余発の銃弾を人民軍哨所に向け発砲する挑発行為を強行した。これにさきがけ、アメリカ帝国主義侵略者は、さる一月二十七日から三月九日までの間に非武装地帯内に不法搬入した軍機関銃をはじめ各種の自動火器で共和国北半部地域と軍事境界線一帯にのべ一三三回にわたり一万五五〇余発の銃弾を発砲したし、二月十一日から三月五日までの間に、非武装地帯内に不法搬入した一〇五ミリ曲射砲、八八・九ミリ対戦車ロケット砲をはじめ各種の砲で軍事境界線一帯に一四回にわたり計一二〇余発の砲弾を撃ち込む重大な挑発行為をはたらいた。

南朝鮮人民は、武装遊撃闘争をはじめとする果敢な反米救国闘争を展開し、アメリカ帝国主義の植民地支配体制を深刻な危機においやっている。また、いわゆる三選改憲問題につながる派閥争い、慢延する不正腐敗、ファッショ機構の紊乱＝一〇〇万にたっするかいらい軍脱走者、激増するかいらい警察官の退職＝などにみられるとく、危機の深化にともなって自壊作用もその度をいっそう深めている。

三月中旬、アメリカ帝国主義の朝鮮における新戦争挑発策動の重要な一環として強行された「フォーカス・レチナ作戦」は、アメリカ帝国主義のアジア侵略の「突撃隊」としての日本軍国主義の危険な役割を浮彫りにしてみせた。

在日米軍司令部広報部長オーディクの発表によれば、この演習には、仮想侵入者となるものを事前に訓練するための陸軍特殊部隊の要員、パラシュートの包装を担当するもの、演習の審判官や統制官の一部、演習を支援する陸軍専門職員などが日本本土や、沖縄基地から派遣された（サンデー毎日三・三〇）という。

それにさきだつ三月八日には、有田防衛庁長官が参院予算委員会で、このたびの演習にたいする質問にたいし、「防空識別圏の関係で米軍の指揮系統によって、自衛隊の米軍通信基地（千葉県）は、昨年三月、二五三億円の巨費を投じて完成したバッジ・システム（半自動防空地上管制組織）に組込まれている基地なのである。このバッジ・システムにより、南朝鮮にあるレーダー網が、日本、沖縄台湾のレーダーと連係されていることは周知のとおりである。「米日地位協定」にもとづいて設定されたこの日本の「防空識別圏」には、日本国会で論議されたように日本周辺の空域のほか、北緯三十九度線以南の朝鮮半島が含まれているという。

増大する日本の役割

これと関連して注目されるのは日本自衛隊が「フォーカス・レチナ演習」の行なわれたころとほぼ時を同じくして三月四日から一週間「約三千人の仮想敵が日本海沿岸の若狭湾から上陸し、これを自衛隊が滋賀県饗庭野（あいばの）に迎えうち、せん滅するという想定」の陸、海、空三軍の統合演習を予定していたことである。

以上のように、このたびのフォーカス・レチナ作戦は、米、日、「韓」三反動支配層のあいだに事実上存在する「三角軍事同盟」にもとづいて、「米韓日共同作戦体制」を実践に移していることを示すものであった。こうして日本軍国主義は、「米韓日共同作戦体制」をよりいっそう整備すると同時に、朝鮮戦線に日本自衛隊を直接出動させる態勢を完成すべく画策している。

こうした動きは、アメリカ帝国主義が「アジアはアジア人の手で」という極東侵略政策にもとづいて朝鮮における新戦争挑発策動を激化させる一方、日本自衛隊の海外派兵策動を切実に要求していることと、日本軍国主義みずからが海外膨張野欲をもやし、それに積極的に応じようとしていることと関連してさいきん急速に具体化されつつある。米下院外交委員会委員長ザブロッキーは、さいきんアメリカ議会で日本自衛隊の「海外派兵を禁じた憲法はいつ改正されるのか」とアメリカ政府日本関係担当者にただした。そればかりか、米国務省幹部は、「日本歴史は日本からの進攻がつねに朝鮮半島から始まっている」と指摘しながら、「朝鮮情勢に無関心であることは許されない」（読売新聞、二・一〇）と日本外務省幹部にその海外派兵をあおっている。

当面、米日反動支配層は、日本自衛隊の海外派兵をいわゆる「国連軍」参加という形でおしすすめようとしている。すでに一九六六年に日本政府が「防衛駐在官」を南朝鮮に派遣することを決定すると同時に、日本外務省は「国連協力法案」を作成したように、かれらは「国連協力」という名のもとに、南朝鮮派兵を実現しようと画策してきた。そして、「米日定期協議」などを通じて、その実現がいそがれてきた。さいきんも日本政府当局は「ベトナム休戦監視のための国連軍に積極的に参加する」とかたったし（二月二十四日愛知外相）、その具体的内容として「休戦監視の国際機構に日本のレーダー技術者、パイロットを中心とする自衛官を外務省に出向させ、外務省職員として派遣すること」を考慮中であるという（サンケイ新聞、二・二一）。ここに、パイロットまでふくまれていることは、「休戦監視」という口実をもうけて、自衛隊を海外派兵させようとするもくろみが暴露されている。

日本自衛隊の海外派兵をいそぐ米日反動支配層は、さいきん新たな術策を弄している。それは、いわゆる「マラッカ海峡生命線論」であり、「大規模艦隊保有必要論」である。

これについて、前駐日米大使ライシャワーは、「アジアの中の日本の役割」六九年日本語版出版にあたり、日本が原料輸入と製品の海外輸出に大きく依存している条件のもとで、海上輸送を確保するために、アメリカ第七艦隊にかわる大規模な艦隊を保有する必要性を力説している。ライシャワーの海上輸送の保全説は、まさに日本自衛隊の海外派兵策動が「憲法」で禁じられている条件のもとで、日本軍国主義が自衛官の「国連警察軍」派遣方式とともに、海上輸送を保障するという口実の「自衛艦の外航運航」方式による海外派兵実現のための術策を代弁したものにすぎない。

かれらは一日もはやく自衛隊の海外派兵を実現しようとして日本の海上輸送が〝国防の第一線〟であり、〝日本経済の第一線〟であるとさわぎたてたり、日本海上保安庁をしてインドネシア、マレーシア、シンガポール三国に資金を提供し、「マラッカ海峡水路調査団」をおくってマラッカ海峡を調査させたりまでしている。

日本軍国主義者はこのように、アメリカ帝国主義の朝鮮での新戦争挑発策動に積極的に加担しようとしてやっきになっているのであるが、さいきんニクソンの登場とともにこのような動きはいちだんと危険な段階にすすんでいる。さる二月二十一日、日本法制局高辻長官が「自衛権の発動としての交戦権を認める」とまで答弁するにいたったのは、その具体的なあらわれであるということができよう。

（三面よりつづく）

座阻止、信太山自衛隊基地撤去、沖縄闘争勝利）を決定し、四・二八を闘いぬくなかで、堺の地域共闘を強化し、七十年安保闘争を地域で担う実体に築きあげていくことを決定した。集会は、またこの日の闘争が堺における軍事体系に対する闘いの開始を宣言するものであり、共闘会議は堺地域における唯一の反帝統一戦線として、実力闘争の思想で闘いぬくこと、とりわけ、軍需生産に従事する労働者が自ら侵略加担を拒否していく闘いが安保粉砕闘争の内容であり、ベトナム人民と連帯する国際主義であり、安保闘争が労働者階級の全てを決する闘いであることを確認した後、折からの雨をついてダイキンにむけてデモを敢行した。